

日本の身体教育にLODを用いることの意義

— 多様な動きの習得に着目して —

酒向 治子 ・ 森田 玲子* ・ 川上 暁子**

本研究では、世界的に認知されているルドルフ・ラバンの運動形態理論を基に開発されたLOD (Language of Dance) に着目し、LODに関する国内外の歴史的経緯と現況を概観した上で、日本国内で求められている身体教育の方向性を視野に入れながら、LODを導入することの意味について検討を行った。その結果、「多様な動き」の系統性をもった学びが求められている現在の日本の身体教育の現状において、身体の動きの「言語系統図」を構築するべく作られたLODは、多様性のある動きの学習のみならず、系統的な動きの学びという課題についても参照すべき内容を提供すると考えられた。

Keywords：ダンス，身体表現，幼児教育，舞踊教育，LOD

1. 研究背景および目的

1990年代以降、LOD (Language of Dance 「ダンスの言語」の略、以下LOD) が身体表現教育の現場で注目を集めるようになった。LOD発祥の地であるイギリスの学校のダンス教育カリキュラム (the PE and Dance National Curriculum) やアメリカの学校のダンス教育カリキュラム (the National Standards in Dance in the U.S.A.) に採用されている他、メキシコやヨーロッパの国々でもLODアプローチを求める声が高まっている。

一般的に「ダンスの言語」といえば、ダンスの多種多様なジャンルやスタイル特有の動きの語彙を指す場合が多い。しかし20世紀半ばにアン・ハッチンソン・ゲスト (Ann Hutchinson Guest) によって20世紀半ばに考案されたLODはそれらとは異なり、全ての身体の動きに共通する身体運動の原則的な枠組みの追究を目指した運動形態理論である。

ルドルフ・ラバン (Rudolf von Laban) の身体運動理論を基に、基礎的な動きの要素が「動詞 (主要

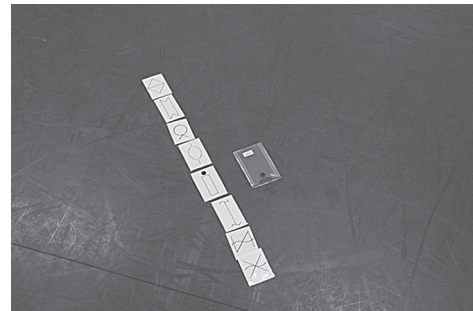


図1 LODの記号

な動作)」「副詞 (動作の質)」「名詞 (身体部位)」等に分類され、「言語」として体系化されている。ラバン理論は長年ダンス分野で研究されてきたことから、LODには「ダンス」という語が残されているものの、その内容はダンス領域に限らず、身体運動領域の基礎理論になり得るものであり、厳密に言えば「ダンスの言語」ではなく「身体運動の言語」といえる。

LODでは音楽における楽譜のように、身体の動きが記号化され、可視化される。LODの開発者で

岡山大学大学院教育学研究科 生活・健康スポーツ学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*川村学園女子大学名誉教授

**武蔵野大学教育学部 児童発達学科 202-8585 東京都西東京市新町1-1-20

The Significance of Using LOD in Japanese Physical Education: Focusing on the Acquisition of a Variety of Movement

Haruko SAKO, Reiko MORITA*, and Akiko KAWAKAMI**

Division of Art Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

**Faculty of Education, Department of Child Development, Musashino University, 1-1-20 Shin-machi, Nishitokyo 202-8585

あるゲスト博士が動作記譜法として世界的に普及しているラバノーテーション (Labanotation) の専門家であったことから、LODの記号はラバノーテーションを土台に考案されている。しかし、ラバノーテーションが動作譜として動きの正確な記録・保存を主な目的とするため記号が複雑であるのに対し、LODは身体教育現場での実践的な活用を目的として発展してきた経緯から記号が簡略化され、固有の記号システムを確立するに至っている。

日本においてはLODの支部が2005年に設立され、これまでに大小様々な講習会、授業づくりが行われている。しかし、LODについての学術的研究は未だ萌芽段階にあり、指導実践例は各地で報告されてきてはいるものの、包括的な普及状況に関する考察は行われていない。そこで本稿では、LODに関する国内外の歴史的経緯と現況を概観した上で、日本国内で求められている身体教育の方向性を視野に入れながら、LODを導入することの意味について検討することを目的とする。

2. 結果および考察

2-1. LOD理論の構築と現状

(1) LOD研究センター設立の経緯：イギリスでの動きのモチーフ研究の流れ

LODの生みの親は、ラバノーテーション研究の第一人者でもあるゲストである。1950年代にNYで子どもにダンスを教える中で、バレエやモダンダンスなど特定のスタイルに固定されない、身体運動の理論研究への取り組みが始まった。「LOD」という言葉が最初に表われたのは、1958年に刊行された幼児教育テキスト*Primer for Dance, Book I*であった。その後イギリスへと移り住み、「動きのアルファベット」の探究を継続。1967年にはLODの研究センターである、LODC (Language of Dance Centre) を設立する。

ゲストはLODの枠組みを完成するまでに、「動き」に関する研究を精力的に行っている。その中で次第に過去の「動き」に関する分類を不十分だと見なすようになっていった。例えばダンサーでもあったゲストが幼少期に学んだチェケッティ・スタイルのバレエ教育では、*plie* (プリエ：曲げる) / *etendre* (伸ばす) / *relever* (上がる) / *glisser* (すべる) / *sauter* (跳ぶ) / *elancer* (放つ) の7つを動きの基本要素とするが、「動きの語彙の中で何故この7つだけが基本となるのか。・・・releverが垂直に上がることを意味するとしたら、その逆の下がるを意味する*abaisser*がなぜないのか」(Guest, 2000)とその動きのリストに対し不満を表している。

他にも舞踊家テッド・ショーン (Ted Shawn) や舞踊教育者のマーガレット・ドゥブラー (Margaret H' Doubler) の動きのリストも偏りがあるとして斥け、最終的にはラバンの運動記号に立ち返ることになった。ゲストはまた、舞踊研究者プレストン・ダンロップ (Preston Dunlop) の「モチーフ・ライティング」理論に強く影響を受けている。ダンロップは1950年代にイギリスにおいてアシスタントのパディ・マクマスター (Paddy Macmaster) と共に、ラバンの動きの記号をダンス教育に活かす方法を模索していたのである。ゲストはラバンの身体運動の記号を見直す中で、ダンロップのモチーフ・ライティング理論も組み込んでいった。

(2) アメリカでの動きのモチーフ研究の流れ：オハイオ州立大学 (OSU)

アメリカでは、イギリスでLOD理論が発展しているのと並行して、ダンロップのモチーフ・ライティング研究が独自に追究されていった。1970年にダンロップがモチーフ・ライティング理論をまとめた書を刊行すると、オハイオ州立大学においてモチーフ・ライティング研究が始まる。1970年代後半には、大学と大学院の舞踊記譜(ラバノーテーション)のコースにモチーフ・ライティングが導入され、さらに1980年代半ばになると、Ohio Arts Councilによる助成を受け、学校教育にモチーフ・ライティングを活

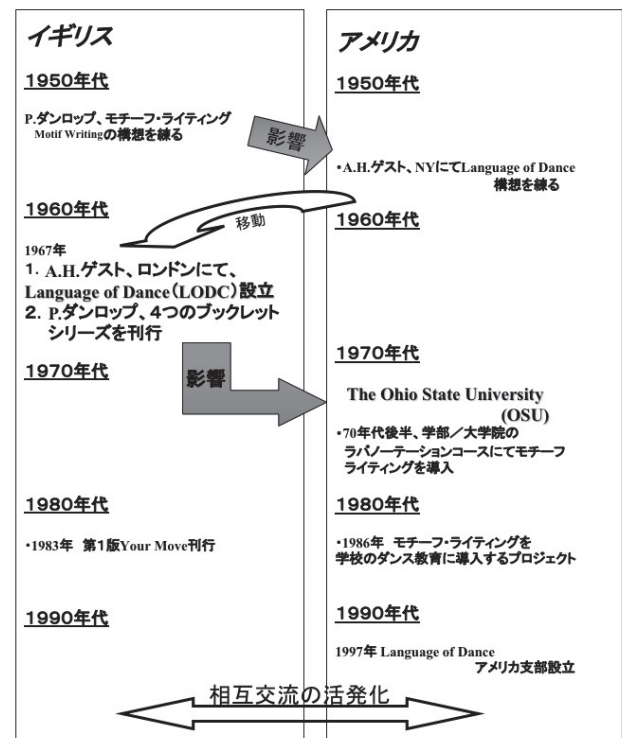


図2 イギリスーアメリカにおけるモチーフ研究の発展 (2005年 作成：酒向)

かす方法が研究されるようになる。その後80年代後半から90年代に入ると、イギリスとアメリカで研究の交流が盛んになり、1997年にはイギリスでLODのトレーニングを受けたH. ウィス (Heidi Wiess) とT. カレン (Tina Curran) を中心に、LODCのアメリカ支部が設立された (Lucy, 1998)。

(3) 名称の問題について：イギリスとアメリカにおける動きのモチーフ研究には、名称の問題がある。LODを「モチーフ・ライティング」と呼ぶことがあることは既に触れたが、アメリカでは、一番最初に影響を受けたダンロップが用いた「モチーフ・ライティング」という名称がよく用いられるのに対して、イギリスでは「モチーフ・ディスクリプション」が用いられている。「ライティング」という言葉が相応しくないという理由として、ゲストは「動きを『書くこと』ではなく、むしろ書いたものから生まれた動きやコンセプトに重点がある」(Guest, 1983)ことを挙げている。この名称の問題は未解決のままであり、今後の課題とされている¹⁾。

(4) 国内外におけるLOD普及の現状

LODの教師はLODC認可の資格 (LOD Specialist と呼ばれる) が必要となる。既に述べたようにLODは身体的な活動に重きが置かれるため、LOD教師にはLODについての深い知識はもとより、動きで表現できる身体上の高度な技術や指導力が求められる。その為LODCは1967年のセンター創設以降、LODに関する書籍等の資料の販売やLOD講習会を開き、世界規模でのLOD Specialistの育成に努めてきた。そしてLOD理論の支柱となってきたのが*Your Move: A New Approach to the Study of Movement and Dance* (1983年初版；通称Your Move) である²⁾。こうした地道な努力が実を結び、90年代以降になると、LODを学んだ人々がダンス教育の様々な場面でLODを試み、その実践報告が提出されるようになる。現在、海外のセンターとしては日本を含めて三つあり (米国支部；メキシコ支部；日本支部)、それぞれの国で学校教育の授業やダンス教育機関、教員養成機関等々で実践が行われ報告されている。国内のLOD指導資格保有者は5名 (2018年現在) であり、幼児から一般人を対象に、授業や単発的な講習会など様々な形で実践が行われている³⁾。

2-2. 国内の身体教育に求められる「多様な動き」

日本の教育課程において「多様な動き」を重要視する流れが、昨今続いている。まず、就学前の幼児期については、文科省が2012年に示した幼児期運

動指針の冒頭の策定意義で、幼児期の運動の重要性と、その運動体験が今後の子どもの生活に影響を及ぼすとの内容が書かれた。また幼児期にどのような運動を体験するべきか、多様な動きの例と、それら多様な動きを含む遊びが示された。幼児期に必要な動きについては、主に「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」と、三つの枠組みで説明されている。

基本的な動きには、立つ、座る、寝ころぶ、起きる、回る、転がる、渡る、ぶら下がるなど「体のバランスをとる動き」や、歩く、走る、はねる、跳ぶ、登る、下りる、這う、よける、すべるなど「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げる、捕る、転がす、蹴る、積む、こぐ、掘る、押す、引くなどの「用具などを操作する動き」があります (幼児期運動指針, 2012)。

また、2017年に幼稚園教育要領の改訂版が告示されたが、その領域健康の中では、様々な遊びを通して全身を動かし、体を動かす楽しさを味わうようにとの言及の後に、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」との追記がなされた。保育者が子どもたちへの支援・指導の際に留意すべき点として、「内容の取扱い」において記されている。また、保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育保育要領も同時改訂があったが、領域健康の3歳以上児の保育に関するねらい及び内容において、同様に「多様な動き」に関する文言が追記された。子どもとの身体活動において、保育者に、子どもの発達に合わせた多様な動きを活動に取り入れることを求める内容である。

このような「多様な動き」の経験を求める流れは、小学校以上の学習課程においても見られる。小学校の体育科に領域として体づくり運動が導入されて20年が経過し⁴⁾、二度の改訂があったが、体づくり運動の領域は今では小学校1年生から高校3年生までのカリキュラムで導入されるようになっている⁵⁾。小学校低学年の「多様な動きをつくる運動遊び」、小学校中学年の「多様な動きをつくる運動」において、体を動かす楽しさや心地よさを感じることに共に、様々な体の基本的な動きを培うことが目的として挙げられている。小学校低学年の「多様な動きをつくる運動遊び」は以下のように記載されている。

〔第1学年及び第2学年〕 A 体づくり運動

イ 多様な動きをつくる運動遊びでは、体のバランスをとる動き、体を移動する動き、用具を

操作する動き，力試しの動きをすること。(平成29年告示 小学校学習指導要領 体育編)

小学校中学年の「多様な動きをつくる運動」では、同様に「体のバランスをとる動き」，「体を移動する動き」，「用具を操作する動き」「力試しの動き」が明記され、さらにそれらを「組み合わせること」との発展的な言及がある。幼児期運動指針との関連性として読み取れることは、「体のバランスをとる動き」，「体を移動する動き」，「用具を操作する動き」の三つの幼児期運動指針の枠組みに、小学校課程では「力試しの動き」が加えられていることが分かる。それらがどのような動きであるのか、具体例が、小学校学習指導要領解説 体育編で示されている。

(ア)体のバランスをとる運動遊び

姿勢や方向，人数を変えて，回る，寝転ぶ，起きる，座る，立つなどの動きやバランスを保つ動きで構成される運動遊びを通して，体のバランスをとる動きを身に付けることができるようにする。

(イ)体を移動する運動遊び

姿勢，速さ，リズム，方向などを変えて，這う，歩く，走る，跳ぶ，はねるなどの動きで構成される運動遊びや一定の速さでのかけ足などの運動遊びを通して，様々な行い方で体を移動する動きを身に付けることができるようにする。

(ウ)用具を操作する運動遊び

用具をつかむ，持つ，降ろす，回す，転がす，くぐる，運ぶ，投げる，捕る，跳ぶ，用具に乗るなどの動きで構成される運動遊びを通して，用具を操作する動きを身に付けることができるようにする。

(エ)力試しの運動遊び

人を押す，引く，運ぶ，支えるなどしたり，力比べをしたりするなどの動きで構成される運動遊びを通して，力を出しきったり，力を入れたり緩めたりする力試しの動きを身に付けることができるようにする。(平成29年告示 小学校学習指導要領解説 体育編)

このように「多様な動き」が学習課程で取り上げられる背景としては、子どもたちの屋外での運動遊びの減少，運動をするかしないかの二極化，体力・運動能力の結果が向上傾向も見られるが，低い水準のままであることなどへの懸念がある。公的な学校教育の中で，授業を通して多様な動きの体験が必要となっている。単に運動すること，つ

まり運動の量を主眼にした取り組みでは足りず，その質，つまり運動の内容が問われている。前述の小学校学習指導要領解説では，低・中学年においては「将来の体力の向上につなげていくためには，この時期に様々な基本的な体の動きを培っておくことが重要である。」と述べられ，「多様な動きをつくる運動（遊び）」で，基本的な体の動きを培う運動（遊び）の実施が求められている。さらに，体づくり運動以外の各運動領域において扱いにくい様々な基本的な動きと書かれている。運動種目の実施ではその種目に必要な特定の動きしか行わない場合があるが，そうではなく，基本的な動きを多種多様に行う体験のできる授業が求められている。

2-2. LOD導入による「多様性」と「系統性のある」動きの学びへ

(1) LODにおける＜動きを構成する最小単位＞についての考え方

LODでは日本語でいう「動き」を二つの語“action”と“movement”に区別して考える。“action”（以後「動作」）は，休止や静止によって区切られる最小単位の（動き出してから止まるまでの）運動の流れであり，“movement”（以後「動き」）は「動作」が複数集まって構成されていると考えられている。それは映画撮影に例えると，「アクション！」という掛け声でカチンコ⁶⁾によって「カット」という最小単位の場面が切り取られ，その集合体が「ムービー“movie”」になるという形と同様と考えてよい。ラバンの運動理論の根底にあるのは，あらゆる運動は最小単位の要素が複合的に集まってできているという考え方である。

LODでは「動きのアルファベット」と呼ばれる動き（動詞）の基本要素が十六あり，そのアルファベットそれぞれに下位項目として分類分けがなされている。アルファベットとは「動作（action）」・「静止（stillness）」・「曲げる（flexion）」・「伸ばす（extension）」・「回る（rotation）」・「移動（traveling）」・「方向（direction）」・「サポート（支持support）」・「スプリング（跳ぶspring）」・「バランス（重心維持balance）」・「フォール（バランスの喪失falling）」・「ある状態へ向かう動作（motion toward）」・「ある状態から遠ざかる動作（motion away）」・「到達点への動作（destination）」・「形をつくる動作（shape）」・「関係づける動作（form of relating）」の十六である。

それぞれの内容の詳細をここで取り上げることはできないため，アルファベットと下位項目の例を一つあげると，例えば「スプリング（跳ぶspring）」

というアルファベットには踏切と着地という点から跳ぶパターンをさらに五つ「両足から両足 (two to two)」・「両足から片足 (two to one)」・「片足から両足 (one to two)」・「片足から踏切と同じ片足への着地 (one to one)」・「片足から踏切と他の片足への着地 (one to the other)」に分けることができる。つまり、跳ぶという動作はこの組み合わせから成っていると考えるのである。さらにLODでは動詞要素だけではなく、力性など動きの質に関わる要素である形容詞や副詞⁷⁾、名詞(身体部位)なども基礎的な学習項目となる。

(2) LODにおける「時間」と「空間」の捉え方

これもラバンの運動理論の基本であるが、LODでは人間の動きをそれ単体で考えるのではなく、時間と空間的要素と共に考える点に特色がある。ラバンは、空間について①部屋など物理的な空間と、②個人空間「キネスフィア (kinesphere)」の二つの観点から分析している⁸⁾。LODにおいてはフロアプランと呼ばれる記号を用いて①の物理的空間の中にどのように動くかを意識できるように工夫されており、さらに②の身体の動きの空間については、そもそも「方向」や「レベル」に強く表れるように、身体を中心軸を通る三つの平面というラバンのス

ペース・ハーモニー理論に基づいて記号が生成されている⁹⁾。さらに時間的な要素については、記号の大きさや、記号と記号の間の休止や静止の間隔によって、動作の時間を記すことが可能となっている。

(3) 「多様性」と「系統性のある」動きの学びの可能性について

第二節では、幼児期運動指針や、学習指導要領を参照に、国内における「多様な動き」重視の流れについて概観した。ここではさらにそこに付随する問題を指摘した上で、LODがどのように問題克服に寄与する可能性があるのかについて考えたい。

体育科における「体づくり運動」についての大きな問題は、その重要性は広く認知されながらも、実際の授業づくりに困難を感じる教員が多いことが挙げられる。近年の愛知県の小学校教員を対象に行われた「体づくり運動」に関する意識調査によると、「体づくり運動」は授業のウォーミングアップとして実施している教員が9割近くを占め、単独の単元としての実施に困難を抱えている状況が浮き彫りとなった。そしてその背景には、市販の体育の教科書やインターネットには多くの運動が紹介されていても「どんな運動をすれば良いかわからない、上手な運動の仕方がわからない、学年やクラスにあった運動

表1 LODの動きのアルファベット

1	Any Action		5	Any Rotation		9	A Spring		13	Motion Toward	
2	Stillness		6	Any Traveling		10	Balance		14	Motion Away	
3	Any Flexion		7	Any Direction		11	Falling		15	Any Still Shape	
4	Any Extension		8	Support		12	Destination		16	Any Form of Relating	

(LODの動きのアルファベットをもとに2007年に作成、酒向)

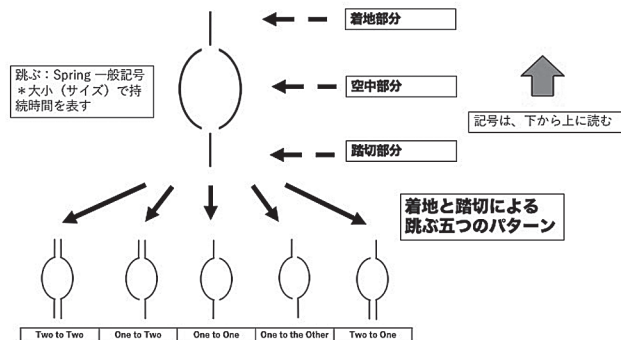


図3 跳ぶSpring (2018年作成：酒向)

が見つからない、1時間取り組ませる運動のネタがない」という運動の選択に関わる根本的な悩みがあるという（深谷他, 2016）。

上記の多様な動きに関する情報は巷には溢れているにも関わらず「何をどのように教えてよいかわからない」と思う教員の意識には、運動に関する知識・経験的実践知が足りていないという問題が関わっていると考えられる。特にここでいう知識として、「運動を構造化し、分類する考え方」に着目したい。例えば、スーパーマーケットに食材を買いにいくとする。食材はその内容で分類され、それぞれの場所に固まっておいてある。買い物客は、料理の内容を頭に思い浮かべながら、各コーナーで食材を揃えていく。もしもスーパーマーケットで雑然と食材が置いてあったら、客は果たして買い物を済ませることができるだろうか。もしくは、ある程度の分類分けがされていても、その分類枠が極端に少なかったらどうだろうか。三～四つの最小限の分類枠があったとしても、今度はその三～四つの枠組みの中で雑然とした食材の中で迷う可能性が高いだろう。愛知県の調査結果は、現職小学校教員にとって学習指導要領が例示する「多様な動き」の枠組みは、「多様な動き」を包摂する「枠組み」として不十分と認知されている可能性を示唆しているといっても過言ではない。

上記を踏まえて、LODが保育者や教員志望者にとってどのような有益な知識を与え得ることが可能かを考えてみる。LODは「多様な動き」に関する幼稚園運動指針の三つ、もしくは小学校学習指導要領解説が提示する四つという枠組み数よりはるかに多い十六の枠組み数を提供する。その数の多さも注目すべき点ではあるが、最も着目すべきなのは「多様な動き」は動きの要素と要素、動きと時間・空間・力性の要素との組み合わせから形成するというその根幹的な考え方ではないだろうか。LODは身体の動きの「言語系統図」を構築するべく作られたがゆえに、まさにその構造的な動きの枠組みについての基盤となる考え方そのものが、運動の学習者、特に将来指導していく者にとって極めて重要な学びになる可能性が高い。また、ある程度明瞭な動きの分類の枠組みを知ることは、指導側にとって必要な要素を足したり引いたりするために不可欠である。特に保幼小中高大連携という学びの連携が注目される昨今、体育科においても「基礎的な動きの要素をどのように組み合わせ、どの段階で教えるか（身につけさせるか）」という系統的な学びへの課題は避けては通れない¹⁰⁾。学びの連携という観点から考えた場合、LODは多様性のある動きの学習のみならず、

系統的な動きの学びという課題に取り組む上で極めて有益な知見を提供すると考えられる。

3. 今後の課題

日本国内においてもLODを用いた授業プログラムが教育現場で試行的に実施されている（本稿注6参照）。本稿では、字数の制限からこれらについて詳細を述べるができなかったため、別稿で海外のこれまでのLOD実践内容を概観しつつ、国内の実践例や教材作成プロセスについて詳しく取り上げていきたい。LODを用いた教材づくりを進める上では、対象者の実情、要素の系統性・発展性を考慮することが肝要であると考え。指導者側となる保育者養成課程や学校教員養成課程の学生や現場の教員を対象にする講習プログラムと、実際の教育現場での教材では内容及び指導方法が大きく異なることが予想できる。とにかくまずは試行錯誤を繰り返し、その実践の中から段階的な教材系統や方法論の確立を目指すべきであろう。また、その際には教材価値を明確にする上でも、効果検証を行う必要がある。

ラバンの運動理論については国際学会が在るように欧米ではよく知られており、日本国内でも工学分野の研究者や¹¹⁾、舞踊研究者にとってもその運動理論の詳細は知らないまでも、重要性について十分に認知されている。しかし、身体運動を学習内容とする体育分野においては、なぜかラバンの運動理論の認知度が低いように感じられる。複雑な動きの体系的な分類の枠組みや、記号によって視覚化できるという情報がほとんど知られていないのが現状である。既述のように、ラバンの運動理論は体育分野にとって有用な知見の宝庫である。国内におけるLODの普及も含め、この状況をいかに改善していくかが課題となると考える。

注

- 1) 動きのモチーフ研究の実践報告では「モチーフ・ライティング」や「モチーフ・ディスクリプション」という言葉を用いず“LOD”という名称が用いられるようになっている。本稿では、名称の問題を避けるために、“LOD”という言葉を用いている。
- 2) LODはこのテキストによって認知度を高めていった経緯から、LODアプローチそのものが「Your Move」と略式に呼ばれることもある。改訂版が2008年に刊行され、日本語翻訳版は2015年に刊行された（森田・酒向, 2015）。Your Moveは22章から構成されており、16の基本的な動きの要素を学ぶ第1章から11章までの前半と、よ

- り詳細で複雑な要素を学ぶ第12章から第22章までの後半に分かれる。翻訳版は、基本となる前半のみ訳されている。
- 3) <幼児向けの実践例>①日本ポーター協会鎌倉・横浜支部の幼児向け指導/講師：森田玲子/期間：平成16年4月～18年1月まで月1回/場所：鎌倉市福祉センター；②幼児向けWS/講師：A.H.ゲスト，森田玲子/日時：平成18年2月9日/場所：茨城県大洗町町立大洗第二保育所；③幼児向けWS/講師：A.H.ゲスト，酒向治子/日時：平成22年2月18日/場所：東京都音羽幼稚園；④幼児向けWS/講師：酒向治子/日時：平成22年11月6日/場所：白岡町勤労青少年ホーム⑤幼児向けWS/講師：V.ファラント/日時：平成29年6月2日/場所：武蔵野大学；<小学生対象 [「体づくり」授業の一環]>⑥講師：酒向治子/日時：平成22年6月/場所：岡山県荏原小学校；<中学生対象 [授業の一環]>⑦講師：山口香 [指導助言：酒向治子] /期間：平成22年11月9日～12月10日まで8回/場所：岡山大学教育学部附属中学校⑧講師：[指導助言：酒向治子] /期間：平成22年/場所：岡山大学教育学部附属中学校<大学生向け授業>⑨講師：酒向治子/期間：2004年～2009年/場所：お茶の水女子大学の授業*教養授業「スポーツ健康実習」として開講。⑩講師：酒向治子/期間：2010年～2018年（現在）/場所：岡山大学*教育学部「運動方法学」授業として開講。
*⑥⑦については、その内容をラバン国際学会 (International Council of Kinetography Laban) にて発表している。抄録はHaruko Sako, Reiko Morita and Valerie Farrant(2012)を参照のこと。⑧についての詳細は (酒向, 2009) 参照のこと。
- 4) 1998年（平成10年）に改訂された学習指導要領において、体操領域は、「体ほぐしの運動」を含めて「体づくり運動」という領域となった。
- 5) 「低・中学年においては、発達の段階を踏まえると、体力を高めることを学習の直接の目的とすることは難しいが、将来の体力向上につなげていくためには、この時期に様々な体の基本的な動きを培っておくことが重要である。そのため、『体づくり運動』では、他の領域では扱われにくい様々な体の基本的な動きを培う運動（遊び）を示している。」（小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 第2章（1）運動領域の内容）
- 6) 音の鳴る拍子木部分とショット情報を記載するボード部分からなる撮影道具。
- 7) ラバンの運動理論において動きの質を表す用語は「エフォート (effort)」と呼ばれ、舞踊分野で

は「effort-shape理論」（現在ではLMA理論）として広く知られている。

- 8) キネスフィアは人間の動ける可動範囲（個人空間）としてラバンの運動理論の中でも特に有名である。
- 9) 人間の動きに見られる空間的なパターンを体系的に構築した理論。体を通る三つの平面①前後面 (sagittal plan; 体を左右に分ける面は車輪に例えて車輪の面 wheel plane ともいう), ②横面 (lateral plane; 体を前後に分ける面は、人が戸口に立ったことを想像して戸の面 door plane), ③水平面 (horizontal plane; 体を上下に分ける面は、テーブル面 table plane) から説明される。
- 10) 従来の体育では、繰り返し単元になる傾向にあり、系統性が見えづらいという指摘がある。
佐藤（文部科学省教科調査官）- 他教科の場合は、小中高校段階での学習内容が以前から明確になっていました。ですが、体育の場合は他教科とやや違う事情があります。例えば、球技（バレーボール）の場合、これまで指導要領では、大綱的な示し方として、中学と高校の学習指導上の内容に明確な差異を示しておりませんでした。しかしながら、本改訂では、指導内容の明確化が求められました。そのためにも、12年間を見通した学習内容を特定する議論が必要だったのですね。
高橋（中央教育審議会専門部会委員）- 専門部会では、体育だけが繰り返し単元であっていいのか、12年間を見通したカリキュラムの構造化を徹底して追究しなければならないのではないかと、という問題意識がありましたね。
下線筆者（体育科教育 2008年，6月号より）
- 11) 例として、（増田他，2011）参照のこと。

引用・参考文献

- ・ Guest, Ann Hutchinson(1983) “The Language of Dance.” *Movement and Dance*.70:14.
- 一. (2000) “How Language of Dance First Developed.” LODC 講習会配布資料.
- ・ 厚生労働省 (2017) 保育所保育指針.
- ・ 酒向治子 (2009) LODを用いた創作ダンス指導の実践と課題—大学生を対象として—。お茶の水女子大学人文科学研究. 5: 157-173.
- ・ 酒向治子・出原智波・永田絵里子・猪崎弥生年 (2014) 教師と教師教育者の協働による男女共習「現代的なリズムのダンス」授業づくりの試み—O 大学教育学部附属中学校の事例的研究—。『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』 158:169-168.

- ・ 内閣府 文部科学省 厚生労働省 (2017) 幼保連携型認定こども園教育保育要領.
- ・ 七澤朱音 本田拓二 (2014) 運動のリズムを重視した体育学習がもたらす効果に関する研究-低学年における「多様な動きをつくる運動遊び」を通して-. 体育科教育学研究 30(2):1-11.
- ・ Haruko Sako, Reiko, Morita and Valerie Farrant (2012) “The Possibility of using Language of Dance (LOD) in Japanese Physical Educational Settings” ICKL-Proceedings of the Twenty-Seventh Biennial Conference. 277-281.
- ・ 深谷秀次・早川健太郎・渡部琢也 (2016) 小学校における「体づくり運動」の状況：教員の意識調査を通して. 子ども学研究論集. 8:5-20.
- ・ 増田恵, 加藤昇平, 伊藤英則 (2011) ラバン理論に基づいたヒューマンフォームロボット身体動作の動作特徴抽出と表出感情推定. 日本感性工学会論文誌 10(2):295-303.
- ・ 森田玲子・酒向治子訳 (2015) ダンスの言語. 大修館書店
- ・ 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針.
- ・ 文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領.
- ・ 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領.
- ・ 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 体育編. 東洋館出版社.
- ・ Lucy, Venable(1998) “Demystifying Motif Writing.” JOPERD. 69.6, Aug:33-34.